

建設業出稼労働市場の変容と現局面の特質

- 岩手県「気仙地域」の事例研究 -

岩手大学教育学部 佐藤 眞

はじめに

本稿の目的は、岩手県「気仙地域」¹⁾を対象に、出稼労働者の主要な就労先である建設産業における出稼労働市場の今日的特質を実証的に考察することである。

この地域では、就業者に占める出稼労働者比率が県北地域（久慈、二戸）に次いで多く、そこでの出稼労働市場を特徴づけるのが、出稼専門の大工集団として知られる「気仙大工」の存在である。彼らは、独自の木造軸組の技法を保持し、関東から北海道までを出稼圏内として就労移動してきた。しかし、第1次オイルショックを契機とした建設需要の急激な変動のもとで、その労働市場は大きく変容を遂げつつある。本稿の第1の課題は、その推移を統計資料によって示すことである。

第2の課題は、建設業出稼労働者へのインタビュー調査で得られた資料をもとに、建設出稼労働の現局面の特質を幾分なりとも明らかにすることである。

1) 「気仙地域」とは、現在の大船渡市、陸前高田市、住田町の2市1町（旧気仙郡）を指している。この地域は一般に「気仙地方」と呼称され、江戸時代から、高度な規矩術を駆使する出稼ぎ大工 = 気仙大工の給源地として知られている。

1 岩手県における出稼労働市場の変容

わが国の出稼労働市場は1973年のオイルショックを境にドラスチックな変容を遂げ、出稼労働者は減少の一途をたどっている。「岩手県における出稼ぎの実態」¹⁾によれば、ピーク時、全国で55万人（1972年）だった出稼労働者は3万人（2006年）へと激減している。今日なお、出稼労働者の主たる給源地は北海道・東北であり、全国の9割近くを占める。なかでも青森県（29.4%、8,100人）、北海道（27.1%、8,100人）、岩手県（18.7%、5,600人）で全体の75%を占める。出稼労働者の四分の三が東北・北海道出身者なのである。

岩手県においては、戦後の高度経済成長期から現在に至るまで、出稼労働者の就労先で最も多いのが建設業（1972年：42%、10,489人 2006年：53%、942人）であり、次に製造業（1972年：24%、5,922人 2006年：38%、664人）が続いている。

県内地域別にみると、出稼労働者の最も多いのは2006年時点で、県北圏（二戸・久慈職安管内：66.3%、3,727人）であり、沿岸圏（宮古・釜石・大船渡職安管内：16.8%、942人）、北上川流域圏（9.3%、522人）、盛岡圏（7.7%、431人）の順となっている。

出稼労働者を就労期間により「夏型」（おもに春から夏、4～9月就労）、「冬型」（おもに秋～冬、10～3月就労）、「その他」（通年就労等の季節的要因によらない就労）に類型化すると、「冬型」、「夏型」の季節出稼ぎは比重を低下させてきており、2006年現在、通年出稼ぎをする「その他」（75%、4,216人）が最も多く、「冬型」（21.6%、1,215人）、「夏

型」(3.4%、191人)の順となっている。

さらに、1972年時点で9割(91%、41,399人)を占めていた農家出稼者数(農林漁業兼業者数)は、2006年には2割強(23%、1,293人)に減少している。

これらに示されるように、過去30数年の間に、通年就労する出稼ぎの専門化が進行してきたことを確認できよう。

これまで農家世帯からの出稼ぎは、農繁期に自家農業へ従事した後、農閑期には、都市部での半年以上の出稼就労、そして再び農繁期に帰省(すなわち、離職=雇用保険の特例一時金受給)、というサイクルで就労するパターンが一般的であった。しかし、現在の出稼ぎの特徴は、農業就労期間を圧縮し、あるいは自家農業へ従事することなく、年間を通じての、いわゆる通年就労という形態が主流となっているといえよう。すなわち季節的要因による「兼業出稼」から、農業との結びつきが限りなく希薄化される「専業出稼」へと重点を移してきたのである。

1)「岩手県における出稼ぎの実態」(岩手県商工労働観光部労政能力開発課・財団法人ふるさといわて定住財団、平成19年度版)

2 建設業出稼労働者の就業構造の特質

気仙地域における建設業出稼労働者の現在の特徴は、型枠大工が大半を占めるという点である。建設業出稼就労者で最も多いとされる土木作業員の割合はきわめて低い¹⁾。

「出稼労働者台帳登録状況」²⁾(平成19年度11月時点)によれば、陸前高田市における、160人の登録者のうち、型枠大工が126人(79%)、次いで木造大工が13人(8%)、造作大工が5人(0.3%)、土木作業員は2名という構成になっている。大船渡市においても登録者125人のうち、型枠大工(86人、68.8%)が多数を占める。

入母屋造りの木造住宅施工を得意としてきた気仙大工の給源地ともされる当地域にあって、出稼ぎの主流はすでに気仙大工ではない。今日、いっそう狭隘化する地域労働市場から流出する建設業出稼労働者の圧倒的多数は、いわゆる野丁場への就業機会を見出さざるを得ない型枠大工であることがわかる。

さらに年齢構成をみると、65歳以上が45人(28%)、60歳~64歳29人(18%)、55歳~59歳32人(20%)、45歳~54歳29人(18%)、44歳以下25人(16%)となっており、60歳以上が46%を占めている。

これまで建設業は「3K業種」として、他産業を上回る若年入職率の低さ、高齢化の進展が指摘されてきたが、当地域では出稼ぎ労働者の半数が60才を超え、遠隔地で就労しているのである。

つぎに就労先の分布を見ると、東京55人、埼玉37人、神奈川30人、千葉23人、北海道7人となっており、現在でも北海道への出稼者は確認されるが、ほとんどが関東圏であることがわかる。

では、彼らが出稼就労先をどのようにして決めているのかについて検討しよう。就労先が遠隔地であるため、職業安定所の求人情報を利用する。しかし、それ以外の職業情報や方法で就労先を決定している場合が多いのである。

まず、職業安定所を経由して就労するということは、就労先での労働災害、賃金不払い等の労働問題に対処するうえで、有効な手続きである。しかし、地域によっては、必ずしも職業安定所を経由した就労とはなっていないのである。

2006年の職業安定所を経由した割合をみると、盛岡管内65.4%、花巻管内97.2%であるのに対し、大船渡管内では出稼労働者数445人中、職安経由の就労者は89人（20%）、久慈管内は629人（22%）である。県全体で見ると、職安経由で就労したものは、31.5%に留まる³⁾。

この割合の低さは、職安で得られる求人情報、あるいは職安を介することで得られる就労先保証を必要としない出稼労働者が相当数存在することを示している。

職安以外で何らかの職業情報、就労の便宜を得ているとすれば、その多くは、地元出身者あるいは世話役からの勧誘、縁故や知人の紹介によるものであろう。これに関しては、次章でふれたい。

ここで指摘しておきたいのは、職安を経由しない理由のひとつに、何年にもわたり、同一事業所に再雇用されるケースが少なからず存在するからではないか、ということである。社会保険とりわけ雇用保険特例一時金の給付との関連で、半年以上～1年未満でいったん雇用が打ち切られる。雇用は一時「中断」されるものの、その後、同一事業所に再雇用されるケースが聴き取り結果や「出稼ぎ互助会」資料で、少なからず確認されるからである。

これについて、以下のインタビューを示す。

- ・「仕事の無かったとき、仕事探しながら、現場やっているところを回って、使ってくれないかということで使ってもらったのが、今の会社なんですけど、そこで、35～36年います」（型枠大工、61歳、職長）
- ・「今は千葉八千代台の同じ工務店に27～28年出稼ぎしています」（型枠大工、56歳）

同一事業所への就労は長期におよぶ。しかし、出稼ぎであるがゆえに、毎年、解雇・再雇用が繰り返されるのである。再雇用への不安を抱える出稼労働者が、働き慣れた同一事業所での就労を希望するのは、ある意味で当然であろう。

この場合、直接当該事業所との間で、保証のない不確かなものではあるが、再雇用のいわば「口約束」ができているので、あえて職安を通さないのではないかと考えられる。

1) 高梨昌編『建設産業の労使関係』東洋経済新報社、1978年参照。

2) 大船渡公共職業安定所陸前高田出張所資料。

3) 前掲、「岩手県における出稼ぎの実態」より。

3 出稼労働者の流動と「定着」

建設業出稼労働者の就労先は北海道から関東までの広範囲にわたる。都市部の建設労働市場の底辺部と連結し、建設需要の変動に応じて吸引・反撥を繰り返しつつ、彼らは流動している。それは、次のインタビュー結果に示されている。

- ・「修行の最初は、東京のI市です。マンションの型枠ですから、内部造作はやっていません。最初は釘の打ち方です、打ち方といっても七通りあるって言われるくらい。あとは早さとか、納め方です。東京、神奈川、長野、新潟で五年、それから秋田、山形、福島、上の会社から仕事を請けて。去年は仙台、山形、福島、去年立ち上げの北海道の会社の仕事です」(型枠大工、37歳、職長)
- ・「最初、野丁場の左官を10年やりました、中学出て直ぐ北海道の深川で1年、師匠が地元出身で、その兄貴が会社をやっていたので。それから苫小牧で22~23歳まで、それから東京方面。出稼ぎ先から連絡が来ないので、型枠大工の出稼ぎに転職しました。だいたい1年で変わります。当時(1970年代半ば)、1年くらいで会社を変わるのが普通です。地元(陸前高田)の人で、同じところに2年も3年も行く人はいなかった。今は千葉八千代台の同じ工務店に27~28年出稼ぎしています」(型枠大工、56歳)
- ・「父親も出稼ぎ大工をして、北海道にも出稼ぎしていた。私は中卒後、地元の親方(出稼ぎ)のもとで見習い、千葉の船橋で4年修行、弟子離れしてから、北海道札幌まで行った。都内は1年、埼玉の今の会社が一番長い(35~36年間)」(型枠大工、61歳、職長)

前章でみたように、陸前高田市の出稼労働者の就労先は主として、東京を始めとする関東圏であった。そこでの就労先を「出稼ぎ互助会加入者名簿」¹⁾の累積集計結果をもとに見ると、特定の事業所に同郷出身者が集中していることが確認されるのである。

たとえば、陸前高田市小友町の「出稼ぎ互助会加入者名簿」に記載されている77人中、就労者が集中する事業所として、東京では、(株)N工務店(11人)、埼玉では、(株)O工務店(6人)、(株)S工業(4人)、神奈川では(株)K工業(5人)をあげることができる。

同じく、陸前高田市広田町でも88人中、東京の(株)N工務店(10人)、神奈川の(株)K工業(10人)と、同一事業所に集中しているのである²⁾。

これら出稼労働者は、固定した作業グループを形成し、出稼依存度が高い同一企業へ、集団で就労してきていると考えられる。ただし前述したように、長期にわたり同一企業に就労してはいるが、毎年の解雇・再雇用の反復をとまなう、不安定な就業形態を前提としたものなのである。

今日の出稼労働市場の特質を明らかにするうえで、これらの企業が、特定地域の出稼労働者の一定数を毎年継続して雇用するようになった経緯、その募集方法、また、そこで必要とされる労働力の性格、労務管理、教育訓練、福利厚生等については、よりインテンシブな調査が必要とされよう。

1) 陸前高田市産業部商工観光課資料。

2) 陸前高田市、大船渡市では、これまで「出稼労働者の就労先事業所訪問」を実施してきている。市役所担当課での聴き取りによれば、神奈川の(株)K工業の社長は広田町出身者、埼玉の(株)S工業の社長も地元出身である。

4 職長・世話役の機能と特徴

現在の職長、あるいは、世話役の機能と特徴を技能養成、募集、賃金等について、聞き取り調査で得られた結果を以下に示す。

型枠大工、37歳、職長

- ・「若い人に仕事を教えるようになったのは、寄ってくれば教えるという感じで、28～29歳から。自分は雇われ職長ですから、若いアンチャンには仕事をやりながら教える、こうやったら早いよとか。去年は、北海道から出稼ぎに来た人を預けられて。」
- ・「(仕事のやり方は) 普段は本人に任せていますが、現場が移動したときや、人が替わったときは目配りしている。昼休みとか、みんなの休んでいるとき、あいつどんな仕事しているのかなって、隠れて見に行く。」
- ・「現場が終わって、今の会社辞めるとき、次の現場手伝ってくれないかと頼む人はいますね。特定の人ではないけど、知っている人は20～30人はいますが、人を連れてきてくれと言われる事はあるけど、そのとき、全部自分の手の内を見せてしまうと、いいように使われてしまってね、会社に雇われて何ぼじゃなくて、うちらは腕を売って何ぼだから。足元見られてなめられたら終わりだから、はいはい、辞めさせなければ辞めてもいいですよ、でも苦労するのはあんた達だから、ということ。」
- ・「賃金に関しては、俺の場合は職長といっても、図面を平面から立体に起こせるだけであって、それにかかる時間、ご飯食べてから夜の七時あたりから。残業代という感じでやっているから、ほとんどボランティアですよ。千円とか500円とか。請負だから、早く終わらせようと思えばできる、でも一発仕事だから、はいできました、とって、型枠はずす、そのあと他の業者さんが、壁を張ります、でも、ふくらんでいて、ちゃんと張れないとか、左官で補修しなければいけませんよとか、そうすると補修代金、控除ということに。ここを直さなければいけませんよと、これが百万円だとしたら、左官で10万円、...で20万円取られましたとなって、70万円しかもらえない。早かったかもしれないけど、それをみんなの人工で割ることになると。早ければいいというものではない、スピーディと同時に、精度を要求される。」
- ・「請負先の会社がつぶれてしまったことが2回あります、監督署に不払いということで行って。監督所に行けば、何ぼ夜逃げしたって、あとからその会社が払わなければいけない、最終的に(支払われたのは、7割いかなかった、6割くらいかな。)
- ・「地元と出稼ぎ先での賃金はかなり違うんじゃないですかね、やはり、地元の人と出稼ぎしているのでは意地が違うから。地元に残ってやっている人とは、技術自体が違います。スピードから何から。結局1時間に10個作るってのを、出稼の人は30個作る、だから(地元の)賃金が安いのはそれなりだっていうことで。やる気を出せば、

地元では安い単価かもしれないけど、それ以上体を動かせば、出稼ぎと変わらないような賃金もらえるんじゃないか、結局は条件同じなんですよ。」

- ・「共同請負だから、もし請負額より余ったら、みんなで分配しましょうということで。みんなの頭をはねて、ということじゃなく、等分するからね。たまたまハシタが出て割り切れないとき、1万何千何百円となったとき、何千何百円は、俺にくれとか。」
- ・「寮が用意されているね。寮費は、だいたい平均1日2千円、それでも三食付いているからね、それに諸経費全部入っているから結局は安いのかな。」
- ・「会社の厚生年金かかかってないときは国民年金へ。健康保険も、会社のから国保に切り替える。面倒くさくはないです。結局はなれです。それが当たり前という感じがす。今年はお出稼ぎに直ぐ戻らないで、失業保険もらいます。」

型枠大工、61歳、世話役

- ・「若いときから世話役やってきたからね、会社が大きいから団体請負で、ひと現場いくらというふうに。仲間は寄せ集めだね、出稼ぎとか、その土地の人とか。俺のグループは北海道から青森から、都内の人もあるし。10人前後、まあ、職長だね、地元（同郷）の人もありますよ、ただ、いろいろ好き嫌いがあるわけだよ、それが一番難しいところだね、地元の人が欲しいことは欲しいんだよね、でも出稼ぎっていうイメージが悪い。仕事がないって言いながら、じゃ出稼ぎはどうだって言うのと嫌われる、金だけの問題じゃない、感情的なことがあるのかなって。だから、こっちから仕事を世話して積極的に連れて行くということはない。今の会社では、現場10人くらいで間に合うはずだってことで。それに、問題があると、あの職長は仕事きついと、あそこの親父は仕事がきついと、地元に残って生活している家内が言われるわけだから。」
- ・「今は、雇用保険もらっている人は少ない。」
- ・「一度連れて行って怪我されて、そういう人はこの仕事に、合わないなあということで、次からは声をかけない。」

5 賃金水準と地域格差

建設業常用労働者の平均現金給与総額みると、全国平均が43万9,553円であるのに対し、青森県は26万9,079円で最も低く、岩手県は28万2,345円でそれに次いでいる。首都圏の東京53万5,192円、神奈川43万2,516円、千葉46万6,148円、埼玉39万7,183円と比較すると、その格差は著しいものがある¹⁾。

さらに、職種別に平均現金給与日額をみると、大工、型枠大工の全国平均がそれぞれ1万3,830円、1万2,130円であるのに対し、岩手県は1万1,157円、1万0,520円である。

これに比し、東京は1万6,930円、1万6,400円、埼玉が1万6,270円、1万5,200円であり、

岩手とでは1.5倍前後の賃金格差が存在することを示している²⁾。

- 1) 「毎月勤労統計調査年報」厚生労働大臣官房統計情報部、事業所従業員規模30人以上。
- 2) 「平成16年屋外労働者職種別賃金調査報告」厚生労働大臣官房統計情報部。

6 建設業後継者の養成訓練

気仙地域の建設業における養成訓練は、公共職業訓練施設として大船渡職業能力開発校がある。「普通職業訓練」（修業年限1年、定員各10名）を実施しており、平成18年度入校者は、建築科・普通課程（1年）ならびに建築科・短期課程（1年）で、それぞれ6名、修了者数は6名、4名である。

また、陸前高田職業訓練協会による、認定職業訓練施設である陸前高田高等職業訓練校の入校者の推移を見ると、木造建築科、建築設計科ともに、ひと桁台の入校者にとどまり、平成17年度の入校者総数は4名、在校生数9名、修了者5名となっている。

むすび

本稿で対象とした気仙地域の経済と就業構造は、大量の出稼労働力の存在を前提とするものであった。また、出稼労働力の首都圏労働市場への流出を促す要因のひとつに都市部との著しい賃金格差も指摘できよう。現時点では、減少の一途をたどる公共事業投資ならびに新設住宅着工戸数の激減の直接的影響と相俟って、出稼労働者の高齢化による引退、新規入職者の減少にともなう深刻な後継者不足により、岩手県そして気仙地域が果たしてきた建設業出稼労働力の給源地としての位置は大きく低下しつつある。

地域での就業を前提としない建設業出稼労働者の供給システムが、就業者の雇用と生活の最低限保障を軸に、再構築されるべき段階に来ているといえよう。

気仙地域の出稼大工の歴史的な分析に関する参考文献をあげておく。

- ・平山憲治『気仙大工——歴史と人物群像——』NSK地方出版、1978年。
- ・平山憲治『気仙大工雑纂』耕風社、1992年。
- ・高橋恒夫『気仙大工／東北の大工集団』図書出版社、1992年。
- ・新長明美『かまど神と「はだかかべ」』日本経済評論社、2004年。